

＜今日の説教のポイント コリントの信徒への手紙Ⅰ 6章1～11節＞

①教会と信仰者の実態 — なお罪深い自らに目を注ぐ時

パウロは、「聖なる者たちに訴え出ないで、正しくない人々に訴え出るようなことを、なぜするのです」(1)とっています。ここで「正しくない人々」と言っているのは、教会外の人々を「正しくない、間違っている」と馬鹿にしているのではなく、イエス・キリストの福音の意味の理解においてはまだ「正しくない人々」という意味です。福音の意味を正しく知った者は、「日常生活にかかわること」(3,4)の考え方も変わるはずで、だのになぜその争いの裁定を教会外の人にしてもらおうとするのか(4-6)、否、むしろ、そんな争いをする事自体が恥ずかしいことだ(7a)、十字架に黙ってかかられたイエス様から「あなたを訴えて下着を取ろうとする者には、上着をも取らせなさい」(マタイ 5:40)と教えられたことはどこに行ったのか(7b)、とっています。

②教会と信仰者の希望と可能性 — 救いの神様に目を注ぐ時

「正しくない者が神の国を受け継げないことを、知らないのですか」(9)も深い理解が求められる言葉です。福音、つまりキリストによる神様の恵みを深く理解したなら、何事が起こっても、神様に信頼して「主にある平安」を覚えて歩めるはずで、「神の国」の開始です。9節でパウロはそのことを問うているのです、つまり、「コリントの信徒たちよ、あなたたちは信仰者となったのに、このことがまだ分かっていないのか。だから、『日常生活にかかわること』を以前と同様に考えるのか」と。しかし、「主イエス・キリストの名とわたしたちの神の霊によって洗われ、聖なる者とされ、義とされています」(11)と語りかけています。「洗われ」とは、キリストの十字架の死によって罪赦されたこと、「聖なる者とされ」とは、神に属する民とされたこと、「義とされ」とは、新たな道を神と共に歩く者とされたことを意味しています。「私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んで下さったことにより、神は私たちに對する愛を示された」(ローマ 5:8)のです。教会はこの主の愛に應えて生きて行こうとする者たちの群れであり、そこに希望と可能性があるのです！